（二〇一五年度）

7 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は21ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

AK-A-07

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私たちにとって苦しみや悩みとは、単なる苦痛という感覚の問題ではなく、意味の次元で考えられる。そこでは自分が行っていることの意味や、場合によっては、生きていることの意味までもが、[1]不透明になるのである。こういった中で、私たちは意味を必死に求める。「もし仕事をリストラされたら、必死で求めるのは新たな仕事口であって、意味ではない」などとは言えない。やはりそこでは、これまで長年その仕事に携わってきたことの意味は何だったのか納得することが求められているだろう。そして、そのような意味の再発見や意味の回復のためにも、そういった苦しい体験を言葉にして他者に語り、何らかの仕方で体験の共有ができたら、それは有難いことだろう。だからここでも、そのつらい気持ちに文脈を与え直していくような言葉の働きが重要になってくる。

もちろん苦しみの体験の共有においても、言葉の音声的・身体的特性は重要な働きをする。消え入りそうな小さな声、うつむき気味な体勢、落胆した表情、生気を失ったまなざし、こういったものによって語り手の言葉が媒介されるからこそ、それは聴き手を引きつける。もしこういった生々しさが言葉に含まれないなら、その言葉は、人に働きかける力を失うだろう。しかし、そういった感情を整序化し同時に鎮静化するような仕方で、その感情が位置づけられている文脈を構成し直し理解するのでなければ、自分の行っていることの意味や生きていることの意味といったものは[2]再び見えてこないだろう。

しかしながら、皮肉なことに、苦悩は、それが深いものであればあるほど言葉にしていく必要があるのにもかかわらず、より語りにくいものになってしまう。気持ちが揺れ動き、動転し、混乱もしているような状態にあっては、それを言葉にする難しさを感ぜずにはいられない。しかし問題はそれだけではない。そういった苦しんでいる者と交流する者たちのあり方も、感情が位置づけられている文脈を言葉にすることを難しくしているからである。

すなわち、私たちはしばしば[3]自分が聴きたいことを聴くような、自分の都合によい聴き方、自分の期待に合わせた聴き方をしてしまう。とくに相手がひどく苦しんでいるとき、相手の激しく動転する気持ちに呑みこまれてしまえば、ひとたまりもな

いという恐れからか、「なんでそんなことにいつまでも悩むのか、いい加減に立ち直ってほしい」という自らの欲求や期待の側から相手に関わってしまうかもしれない。また、「早く元気になって」と励ましの言葉をかけたり、また「前向きになれば気分が少し良くなるよ」とずうずうしく助言までしたりする。しかしこのような励ましや助言には、たとえそれが善意からのものであっても、「面倒に巻き込まれたくないから、早く立ち直ってほしい」という自分の一方的なニーズが潜んでいるかもしれない。そうでなくても、苦しんでいる当人は、そのような励ましや助言を聞いて、そんな簡単に前向きには絶対なれない自分の心境が理解されていないと、さらに隔絶感を深めてしまうことだってあるだろう。

では、相手と親密な関係を築いていれば、[4]うまくいくのだろうか。おそらく事情はそう単純ではないだろう。私たちはむしろ、まさに相手と親密であることによって、その相手の状態により翻弄されやすくなっている。そして、それゆえに相手の気持ちを統制して、翻弄されまいとするのである。例えば友子が上司からの執拗な嫌がらせでひどく悩んでおり、友子の精神状態が不安定ならば、相談相手になる一郎も少なからず、それに巻きこまれざるをえない。すなわち、一郎もそれに平然としていることはできず、心は動揺することになるだろう。しかし、だからこそ、動揺しまいとし、友子に対する統制的な姿勢が強まっていくこともある。例えば友子の悩みを細部まで親身に聞くよりは、「そんなことはいちいち気にしない方がいいよ」という仕方で、一郎自身の期待を押し付けた対応をしてしまう。ここでは一郎は友子が自分の想定内の気持ちであることを期待しているが、まさにその期待が、友子が感じている気持ちの揺らぎ・ためらい・逡巡といったものを抑えこむような働きをしてしまうのである。

このように、喜びの体験の共有と異なり、苦しみや悩みの体験の共有は、大きな困難を抱えている。前者の場合は、一体感は比較的に達成されやすく、心も通わせやすいのに対し、[5]後者はそう簡単にはいかない。

しかし、苦しみの体験の共有においても[6]言葉の文脈構成的な働きが、重要であることには変わりがない。相手の苦しみを理解するには、自己の状況に没入するのではなく、それからいわば離脱し、相手の状況を想像する必要があるが、その状況が錯綜し込み入ったものであればあるほど、相手の語る言葉の文脈構成的な働きが重要になる。再び友子の例で言えば、上司に対

する友子の激しい怒り、その上司が友子に対してもつ嫉妬心、また友子が職場で課されている任務など、友子の悩みをとりまく多様な文脈が語られることで、一郎は複雑に入り組んだ友子の気持ちが分かるようになるし、友子もそういった一郎の理解に促され、自分の気持ちを捉え直していくことになるだろう。

ただそれでも次のことにはやはり注意する必要がある。すなわち、苦しんでいる相手にどう言葉をかけたらいいのか分からない、「あなたの気持ちが分かる」などと、とても軽々しく言えない、そのような状況があるということ。すなわち、「あなたの気持ちが分かる」と口に出して言ってしまうことが、何よりも気持ちが分かってないことの証拠であり、相手の気持ちの冒瀆ですらある、そういった状況があるということ。相手はただ肩を落とし沈黙し、言葉を発することさえもできない。ここでは、言葉を介した体験の共有というものは成り立たず、また言葉による共有ということ自体が胡散臭くさえ思えるかもしれない。このようなとき私たちは言葉の無力さを痛感し、[7]言葉の哀しみということを感じずにはいられない。

しかし、言葉が無力だと感じられても、やはりそれでも、言葉に頼っていかざるをえないのが私たちである。それは他でもない、私たちが[8]意味の世界に住まう存在である以上、ほぼ宿命に近いのではないか。だからどんなに言葉の無力を知ろうとも、多くの場合、再び言葉へと戻ってこざるをえない。それは、言葉に戻ることを自ら能動的に選び取るというよりも、むしろ人にはそれしか選択肢が残されていないということなのではないか。

かくして人は長い沈黙の後、ためらいながらも、自分の苦しみを言葉にしていく。また聴き手もためらいながらも、その言葉にうなずき、その体験を受けとめていく。ここにあるのは喜びの体験の共有のときのような一体感ではない。しかし、語り手との間には隔たりがありながら、まさにその隔たりを乗り越えようとせずに隔たりを隔たりとして[9]敢えて迎え入れていく、そのようなところに辛うじて成立する体験の共有というものがあるのではないだろうか。その隔たりを埋めることを半ば断念することによって、かえって相手の気持ちを大切にするという営みが始まる。苦しみの体験においては、理解を志向しつつも、理解できない部分をどこまでも残していくような、また、隔たりの縮小を視野に入れつつも、隔たりをどこまでも残していくような、そういった[10]両義的な共感的交流の可能性を探求しなければならないだろう。それは心の通い合いのみならず、心

の通い合わなさを大事にしていくことで見えてくるような共感的交流の可能性であり、またそういった、綻(ほころ)びを内にはらんだ共感的交流においてこそ、言葉は、人との繋がりを形作る力を再び取り戻し、意味の回復への[11]微(かす)かな希望をもたらすことにもなるのではないか。

（早川正祐「言葉と共感的交流」）

問一　傍線部1について、「不透明になる」とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　苦しみや苦痛の感覚とは関わりなく、自分の行為や生きることが疑問に思えてくる。

b　苦しみや苦痛のあまり、自分が何をしているのかが了解できなくなってしまう。

c　苦しみや苦痛を受けてまで、なぜ行為し生きていなければならないか分からなくなる。

d　苦しみや苦痛が、明瞭な感覚とは別に意味の問題として自分の中に立ち現れてくる。

問二　傍線部2に「再び見えてこないだろう」とあるが、「再び見えて」くる、とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　感情的にしかとらえられていなかったものが、言葉や文章を通じて意味として理解されてくる。

b　自分の行為や生きることの意味が自覚され、ようやく納得の行く形で表現できるようになる。

c　すでに一度は失ってしまった行為や生きることの意味が、自分自身にもう一度分かるようになる。

d　それまで見えていなかった自分の行為や生きることの意味が、音声や身体で具体化されてくる。

問三　傍線部3について、「自分が聴きたいことを聴く」とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　自分の一方的な都合のために、相手の心境を理解することができなくなっていること。

b　相手が苦しみや苦痛から早く立ち直ることを期待して、相手を励ましそうとすること。

c　相手の隔絶感に引き込まれることを恐れて、言葉の意味を正面から受け取らないこと。

d　相手に対する自分の期待やニーズを前提として、相手の言葉を理解しようとすること。

問四　傍線部4について、「うまくいく」とは、何がうまくいくのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　相手の苦しみや苦痛を共有すること。

b　相手の心境をただしく理解すること。

c　相手への助言や励ましが役に立つこと。

d　相手の状況について一体感をもつこと。

問五　傍線部5で「そう簡単にはいかない」のはなぜか。その理由として不適切なものを次の中から一つ選べ。

a　喜びの体験の共有よりも一体感が達成しにくいから。

b　自分の期待を投影して相手の気持ちを抑制しがちだから。

c　親密であればあるほど互いの気持ちが動揺してしまうから。

d　共有することによる動揺を抑えようと統制的になるから。

問六　傍線部6「文脈構成的な働き」とはどのような働きのことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　文脈が意味を作り上げていくようにする働き。
b　言葉を語ることで多様な状況を想像させる働き。
c　文脈を作り上げることで意味を与えていく働き。
d　自分の体験を多様な文脈によりつつ語る働き。

問七　傍線部7「言葉の哀しみ」とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　体験の理解や、それについての共有をもたらすとは思えない、言葉の不完全さ。
b　苦悩している相手に、どう言葉をかけたらよいかわからない、言葉の無意味さ。
c　言葉に出してしまうと、かえって無理解や冒瀆にしかならない、言葉の表裏性。
d　肝心のことは言えず、使うことで隔絶感すらもたらしかねない、言葉のむなしさ。

問八　傍線部8について、「意味の世界に住まう存在」とはどのような存在のことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　体験の理解や共有のためには言葉の文脈構成的な働きに依存するしかない存在。
b　悩みや苦しみなどの意味にとって言葉が不完全で無力ですらあることを知る存在。
c　言葉による一体感の達成によって互いにとっての体験の意味を理解していく存在。
d　文脈的な言葉で自分の気持ちを再確認することでのみ一体感を回復できる存在。

問九　傍線部9「敢えて迎え入れていく」とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　理解の相違や行き違いを同一化することは考えず、相手との共感的交流を重視すること。

b　理解の相違や行き違いを無理に同一化しようとせず、相手側の気持ちに一致させること。

c　理解の相違や行き違いが残っていることを知りつつ、相手との相違点を受け入れること。

d　理解の相違や行き違いがあることを前提として、相手との体験の共有を求めていくこと。

問十　傍線部10について、「両義的な共感的交流の可能性を探求」する、とはどのようなことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　相手との心の交流が完全にはできないことを前提としながらも、それでも互いに共感を求めていこうとすること。

b　悩みや苦しみが、体験の共有という点につねに困難を抱えていることを自覚しつつ、互いの共感をめざしていくこと。

c　一体感をもった互いの理解を求めては行くが、その際つねに、理解の相違や行き違いの可能性を残そうとすること。

d　一体感と理解不能という相反した要素をもつ共感によって、どうすれば互いに理解し合うことができるかを考えること。

問十一　傍線部11で「微かな希望をもたらす」とあるが、筆者がそのように考える理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　自分とは違う相手の気持ちや体験を尊重することによって、新しい意味を獲得する言葉の可能性が生じると考えているから。

b　共感の中に無理解のような綻びを見出すことではじめて、言葉はそれを乗り越える力に目覚めることができると考えているから。

c　理解の行き違いや一体感の困難から自分の無力さを知るとき、言葉は相手を無理に抑制することをしなくなると考えているから。

d　理解の相違にためらいながら言葉をやりとりするときに、ようやくその言葉の意味が作り出されていくと考えているから。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

邪妄の幻像消散するは大に怡ぶべし。然れどもこれと共に真正なる幻像までもその光彩を失うは悲むべし。いわゆる革命なる者は虚妄不正を破壊すといえども、これと共に真正なるものをも棄つ。これ免れ難き結果なり。今は此の真正なる幻像すら破壊せられて、1円満美妙の相は、如何なる方面に於いても認め難く、何処を眺めても露骨なる実物のみ、

2「往きぬる者は消ぬる泡、来らん者は遊糸の暫し髣髴く水の影。」3（坪内博士著『浦島』）

花もなければ香もなく、ただ無趣味の実物、地金のみの見ゆる時代なり。さらば吾れら再び幻像の世界に帰らんか。されど一旦の幻像破れて、実相、現実を知りたる以上は、如何にしても古の幻像界に帰り得るものにあらず。4知ったが因果。知りたる後は、知らざる前の美しき幻像を眺むること能わず。妻と同棲すること数年の後に至りて、その妻を再び花嫁時代に還して見んこと到底望むべからざるなり。浦島は一たび竜宮に遊びたれど

5「轟く浪に咽びては怨咽として怨むが如く遠のく波を潜りては悠々として憧狂るる凄惨たる肉の声」（同上）

は絶えず彼れの胸臆に響けり。吾れらいかに現実を離れて、楽しき幻像界に遊ばんと欲するも能わず、神代に帰すること能わず、希臘の昔に還る能わず。

6されど真正の幻像その物は保存せざるべからず。宇宙の真理を宿したる幻影は、吾れらの眺めざるべからざる物、これと離れては人生の趣味なるもの存在せざる也。7さらば何物か此の幻像の光明を発揮するものぞ。誠実なる学術技芸究理は、皆な此の力を有すべし。幻像を破壊したる科学といえども、これを改造再建するの力を有す。宗教哲学芸術は、皆なその力を有すべきはずなり。然れども現在の宗教は、徒らに形骸の守護消ゆべき幻像の保存に努力するのみなれば、頼みとするに足らざるなり。哲学は部分の研究捜索に孜々として、これまた頼むべからず。ショーペンハウエル、ハルトマンの哲学は、哲理として幾許の価値ありやは別問題なれど、とにかく大組織を作りて幻像を起したる力は称揚すべし。今はかくの如き哲学なし。さらば何処にか道を求めん。近くして力なるは芸術なり。吾れらその世界に於いて、幻像を認め得べく、芸術は比較的容易に此の幻

像を起し得るの力を有す。

幻滅時代なるが故に、有ゆる方面に於いて将来の発展を如何にすべきかとの問題横わる。芸術は先ず進んで、幻像の再建に着手せざるべからず、されど如何にしてこれを為すべき乎。幻滅の世に彷徨する者を導きて、真正の幻影界に優遊せしむる芸術は、いかなる物なるべきか。

幻像の勢力を有したる時代に生れたる芸術の遊芸的分子を排除して、真実その物に基礎を定めたるもの、これ将来の芸術たらざるべからず。[8] 幻滅時代の世人が欲むる物は、真実を描きたる無飾芸術なり。絵画、彫刻をはじめ、小説、戯曲等皆な此の方向に進まざるべからず。而して此の芸術の最も善き代表は、故イブセンの戯曲なりとす。

既往の芸術には幻像伴えり。幻像を喜ぶ時代の産物なればそのこれを伴うは敢て怪むに足らず。[9] 此の幻影を排除して、新幻像を起すが今の急務なり。幻像とは何ぞや。遊芸的分子に外ならず。かの遊動と呼ばれたる源より発したる芸術、即ちこれにして、こは幻像に迷える過去の人々を、喜ばしめたるもの、決して芸術その物の生命に非ず。古の芸術にして、今なお大と称せらるるは、技芸の巧緻に由るに非ずして、或る真実を誠実に表現したるが故なり。上古の拙劣なる彫刻物にして今日なお愛玩せらるるは、その中に何らかの妙義を含蓄するが故にして、断じて技巧の如何に由るものに非ず。

暫らく範囲を文学に限らん。多くの古文学には、当然切り棄つべく、あるいは改造すべき幾多の遊芸的分子あり。詩形の如きその一なり。詩とは、宇宙の神秘を感じて、その微妙の相を表さんため、自然に韻律を作りし物、即ち吾が感想を誠実に吐露したるものなれど、その本体は何時しか忘られて形のみ残り、徒らに字句の排列措置を喜ぶに至りぬ。ただに詩のみに非ず、散文にありても、遊芸的分子は大部分を占む。吾が国の文学は殊に遊芸的なり。中国文学に於けるもまた此の痕すこぶる鮮明なり。此の無意義の遊芸的分子、これ古人の喜びたる所、其処に何らかの美しき幻像は認められたり。劇に就きてこれを見よ。舞台の人物が仰々しき口調にて、詩句を読むが古の劇なり。ただに詩形を以って相談するのみならず、無用の人物など出で来りて、必要もなき語を発す。吾が劇の如きは殊に甚だし。古人は此の遊芸的部分に大なる趣味を覚えたるなり。オセロやハムレットが、詩を以って煩悶を述ぶる所に、美しき幻像を見たるなり。されど吾れら果して此の遊芸的分子に接して趣味

を感ずるや否や。金ピカの衣裳は祖先を喜ばしめたりといえども、今はこれを見て、楽しく感ずる人有らざるべし。御注進御注進と駈け出ずる者が、争闘の真似をしたり躍ねたり、踊ったりする様は、古人の眼にこそ面白き幻像を浮ばしめたれ、今人の眼には、ただ滑稽のみ。今人は何事に接しても、直に真実を見、またこれを看取せんと欲す。技巧の如きはその問う所にあらず。[11]イブセンが、「ブランド」を作し「ペールギント」を試みたる後、散文劇に転じたるは、時勢を看破したるものと謂うべし。日露戦争当時の通信に就きて考うるも此の理明かなり。新聞記者が、『三国志』、『太平記』などより字句を借用し、種々の形容、譬喩を用いたる記事と、修辞法も知らぬ一兵卒の書翰とを比較して見よ。前者は巧に描かれたり。されど感動する所なし。兵卒が真情を綴りたるものは、遊芸的分子こそなけれ、一読誰れかまた泣かざるものぞ。

（長谷川天溪「幻滅時代の芸術」）

〈注〉 邪妄…正しくないこと。　遊糸…春の野に立ちのぼる気。　髣髴く…ほのかに見える。　怨咽…恨みむせぶこと。　胸臆…心の中。　孜々…励み努めるさま。　ショーペンハウエル…ドイツの哲学者。　ハルトマン…ドイツの哲学者・美学者。　優遊…和やかでのどかなさま。　イブセン…ノルウェーの作家。　遊動…遊戯。　オセロ、ハムレット…ともにシェイクスピアの劇作の主人公。　注進…事件を急ぎ上申すること。　ブランド、ペールギント…ともに叙事詩風の戯曲。

問一　傍線部1「円満美妙の相」とはどういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　健全な美しさが行き渡った世の中。

b　華やかで美しくゆるやかな気持にさせる様子。

c　繊細な美しさをよしとする考え方。

d　しみじみとした美しさを感じさせる景物。

問二　傍線部2は、どのようなことを表現しているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　死者は人知れず生者として生まれ変わるということ。

b　世の中のどこを見ても古き良きものがないということ。

c　生あるものは常に過去を背負っているということ。

d　人の世はなんともはかないものであるということ。

問三　傍線部3「坪内博士」は坪内逍遥のことである。逍遥の著作を次の中から一つ選べ。

a　浮雲　　b　風流仏　　c　当世書生気質　　d　蓬莱曲　　e　五重塔

問四　傍線部4「知ったが因果」とはここではどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　知ってしまってはもうとりかえしがつかない。

b　知ったことが次の展開をもたらしてくれる。

c　行為の善悪に応じて報いが来ることを知った。

d　不幸に陥らねばならぬ運命を知った。

問五　傍線部5について、「凄惨たる肉の声」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　破れかぶれの身を裂くような言葉の響き。

b　すごみのある堂々としたもの言い。

c　むごたらしい心の底からの叫び。

d　悲しく哀れな細々とした嘆き。

問六　傍線部6のように考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　真正の幻像がなければ生きる上でのふくよかな味わいを得ることができないから。

b　真正の幻像があることによって宇宙の真理を知ることができるようになるから。

c　真正の幻像をもつことによって失われた古の幻像を取り戻すことができるから。

d　真正の幻像をもたないと現実を正確に把握することができないから。

問七　傍線部7について、筆者はこの「何物」を何と見定めているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　科学　　b　宗教　　c　哲学　　d　芸術

問八　傍線部8について、「真実を描きたる無飾芸術」とはどういう芸術か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　技芸の巧緻を極めた芸術。

b　遊芸的な要素を含まない芸術。

c　幻滅時代の様相を描いた芸術。

d　邪妄の幻像をもたない古代を志向する芸術。

問九　傍線部9について、筆者の考える「新幻像」に相当するものを、次の中から一つ選べ。

a　作品において内容と形式が一致していること。

b　作品のなかに深遠な意味が内包されていること。

c　作品において技巧が目立たぬように仕組まれていること。

d　作品のなかに過去の作品の芸術性が生かされていること。

問十　傍線部10について、ここにおける「古人の眼」とはどういうことを表しているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　滑稽なふるまいを冷静に見つめる認識。
b　真実と演技のずれに芸術性を感じる価値観。
c　過剰な表現に愉快を感じる心のあり方。
d　現実を模倣するうまさに感動する受け取り方。

問十一　傍線部11「イブセン」について、筆者はこの作家をどのような人物として考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　芸術における遊芸的要素を高度に洗練させた作家。
b　日露戦争当時の文学に散文劇の可能性を拓(ひら)いた作家。
c　日本の文学に技巧が多いことを見抜いた作家。
d　真実を誠実に表現して邪妄の幻像を打ち破った作家。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

それは一九六〇年代のことであったように思う。その日の私は、当時、世界的に流行っていたヨーロッパのポピュラーソングの歌詞を読んでいて驚いた。そこにはこんな台詞(せりふ)があった。[1]「それが真実だ。なぜなら誰もがそう言っているからだ」。この台詞は皮肉ではなかった。

もちろん、誰もが言っていることが真実だとはかぎらない。むしろ真実は、少数者の口から語られはじめることのほうが多い。しかしそのとき私が驚いたのは、そのことに対してではなかった。ヨーロッパの文化的流儀では、こういう言い方はけっしてしなかったはずだと思ったのである。むしろ逆に、誰でもが言っているようなことしか考えられなくなった〈私たち〉の現実を、悲しみをこめて告発するのが、私の知っていたヨーロッパ文化の流儀だった。

近代社会はすべての人々を個人に変えた。農村共同体や職人共同体のなかで、まさに共同体の一員として暮らしていた人々が、近代的市民として個人になったのである。

それは人間に自由をもたらし、個人をいっさいの束縛から解放した、偉大な革命のはずであった。[2]ところがそのときから、人々は、個人になった人間の虚(むな)しさをも、また語りはじめなければならなかったのである。

ひとつに理想的な個人が生みだされたはずなのに、その個人はつねに利己主義者として目の前にあらわれてくる、という悩みがあった。現実には個人は上品な利己主義者であり、利己主義者は下品な個人にすぎなかったのである。

そしてもうひとつ、もっと重要な悩みがあった。それは自由な個人がしばしばみせる精神のひ弱さに対する落胆であったといってもよい。

共同体の時代には、共同体に属していることによって、自分の歩むべき道が誰にでも自然にわかっていた。だから人々は確固とした精神をもって、人間とは何かを語ることができたのである。ところが個人の時代になると、人々はすべてのことを自分の責任で判断しなければならなくなった。そのとき人々は、より自由な精神を発揮しはじめただろうか。それとも、自分が

何をすべきなのかに迷い、うろたえ、社会の動きに従うだけの弱い人間になりながら、自分自身を喪失するようになったのだろうか。

近代社会の形成のなかで人々の目に映っていたのは、人間に自由を与えたはずの個人の解放が、むしろ、[3]ひ弱で自由の行使にさえ畏縮してしまう人々、を生みだしていく様子であった。この問題は今日に至るまで、ヨーロッパ思想史の大きな課題になっている。個人の解放は、日本で考えられているほど、順風満帆ではなかったのである。

真のキリスト教徒になろうとしたデンマークの哲学者キェルケゴールが、一八四九年に『死に至る病』のなかで、近代的個人の精神を絶望という言葉で語らなければならなかった事情もそこにあった。彼によれば、[4]近代的個人は、自らの精神を真剣にみつめればみつめるほど、自分の精神の奥底に絶望がひそんでいるのを発見せざるをえない。もちろん絶望を感じていない人々もいる。だがその人々は、真実をみつめる精神を喪失していて、もっと深い精神の絶望のなかに置かれているのだと。

そして弱い個人は、神の前に一人立ち、自らが砕かれていくことを受け入れる真の自己愛ではなく、世俗の自己を肯定する[5]「変装された自己愛」を、精神の軸にするようになった。その「変装された自己愛」におおわれた人々は、自らの精神で真実をつかみとっていこうとする苦難から逃げだし、自分を群衆のなかに埋没させるようになっていった。

「そのような人間は自分の周囲にある多くの人間の群を見、……他人と同じである方がずっと楽でずっと安全だというような気持になる――こうして彼は群衆のなかの一つの単位、一つの符牒、一つのイミテーションに堕するのである」(斎藤信治訳)。

自由の問題がくり返し議論されなければならなかった背景には、このような視点があったのである。近代的な個人の社会であるがゆえに自由が語られ、またそのような社会であるからこそ、精神の自由が畏縮していくという矛盾の前で、人々はたじろいだ。個人となった人々の可能性と虚しさが、その出発点にはあった。

ところで、戦後の日本でもっとも広く読まれた自由についての書物のひとつは、ラスキの『近代国家における自由』ではなかったかと思う。一九四七年版への緒論のなかで、ラスキは次のように書いた。「不正に直面しつつ沈黙を守る人は何時でも

自由の喪失を甘受する人である」(飯坂良明訳)。

自由という課題には、政治、経済、社会的な自由の実現と、人間の精神の自由の実現というふたつの課題がある。現実の社会が自由を抑圧することも自由の敵なら、人間が自由な精神を失うこともまた自由の敵なのである。なぜなら、前者は自由の弾圧であり、後者は自由とは何かを考える精神を失っていくことであるのだから。

といっても、[6]このふたつの自由のあいだに、密接な関係があることも確かだった。ラスキが述べようとしたことのひとつは、この両者の関係だった。「自由の実現と維持は」と彼は書いた。自由への「平等な関心を持つ社会においてこそ望みうる」。政治的、経済的、社会的な自由を保障するものは、人々が等しく自由の実現に関心をもち、それが実現されているかどうかを絶えず監視し、もしもそれが実現されていないならば、その実現をめざして行動する勇気をもつことである。この点で、自由は人間たちの精神の働きに支えられている。

ところが、その精神的な働きを高めるためには、政治的、経済的、社会的な自由の確立が必要になるのである。たとえば、言論や思想、表現、結社の自由などが制限されている社会では、人間が自由にものごとを考える精神の自由も、また阻害されるに違いない。

(内山節「自由論」)

〈注〉 ラスキ…二〇世紀、英国の政治学者。

問一　傍線部1について、この「台詞」が逆に「皮肉」にならないような状況とはどのようなものか。本文の文脈に照らし合わせ、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　ヨーロッパ文化の流儀がすでに廃れきり、伝統的な共同体の一員が完全に近代的市民になりきってしまっているような状況。

b　一九六〇年代、ヨーロッパの若者たちが大人たちの考え方に対し、さかんに異議申し立てを行っていた状況。

c　少数派の中にこそ真実がありうるのだが、最後には多数派の意見を受け入れざるを得ないと考えられるような状況。

d　誰でも口にしそうなことしか思いつけなくなった現代人のあり様を、悲しみをもって告発しなければならないような状況。

問二　傍線部2のように筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　近代社会においては、理想的な個人が生み出されたはずなのだが、実際は下品な人間性の者たちしか生み出さないから。

b　近代社会とは、かつての農村共同体や職人共同体と異なり、他人の温かさを感じることができない社会であるから。

c　誰もが言うことしか言えないような人間が、ヨーロッパにおいて多数生まれてしまったから。

d　個人としての近代的市民は誰でも下品な利己主義者であり、さらに自由を得た個人は精神的な脆(もろ)さを露呈するから。

問三　傍線部3はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　何をしてよいかわからず、他人に倣うだけの人間たち。

b　近代社会において、個人の解放を成しえなかった人々。

c　自身の精神の奥底に計り知れない絶望が潜んでいる人たち。

d　他人に対しいつでも利己主義者として振る舞う人たち。

問四　傍線部4はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　近代社会が生み出してきた個人は、虚しい精神しか持ち合わせず、それを埋めるものがどこにもないことに気づかざるをえない。

b　近代社会が生み出してきた個人は、人間の解放がけっして順風満帆ではなかったことをあらためて思い知らされることになる。

c　近代社会が生み出してきた個人は、自分たちが自由の重みに耐えられない人であったという事実に気づかされることになる。

d　近代社会が生み出してきた個人は、自らの運命に絶望することしかできない人であることに気づかされることになる。

問五　傍線部5はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　神の下す真実を恐れ、世俗にまみれ、真実から逃れる心持ち。

b　神の前で自らの精神の絶望を認めず、真実をごまかしている心持ち。

c　世間の人々の間に埋没してしまうため、変装することを愛する心持ち。

d　自らの精神で真実をつかみ取ることを断念し、落胆する心持ち。

問六　傍線部6のように筆者が述べる理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　政治・経済・社会的自由の実現の課題が妨げられる時、精神の自由を増幅し、社会における自由の総量を補わなければならないから。

b　政治・経済・社会的自由の実現に向けて、できるだけ多くの人たちが精神面での修養に励むことが望ましいから。

c　政治・経済・社会的自由の保障は基本的に精神面の働きとは独立しているが、しばしば両者の協力が必要となるから。

d　政治・経済・社会的自由の保障となるのは人々の精神の働きであり、逆にその精神の働きを支えるのはこれら三種の自由だから。

問七　本文の内容に一致しないものを次の中から一つ選べ。

a　言論や表現の自由が制限される時、自由な思考という精神の自由も妨げられる。

b　近代社会において、人々は精神の自由の制限に苦しめられている。

c　近代的市民社会は、理想的な個人を生み出すことにおおよそ失敗してきたと言える。

d　真実を見つめる精神を喪失すれば、もっと深い精神の絶望の中に置かれる。